



吹田市

文化財ニュース

No. 15

平成6年3月12日

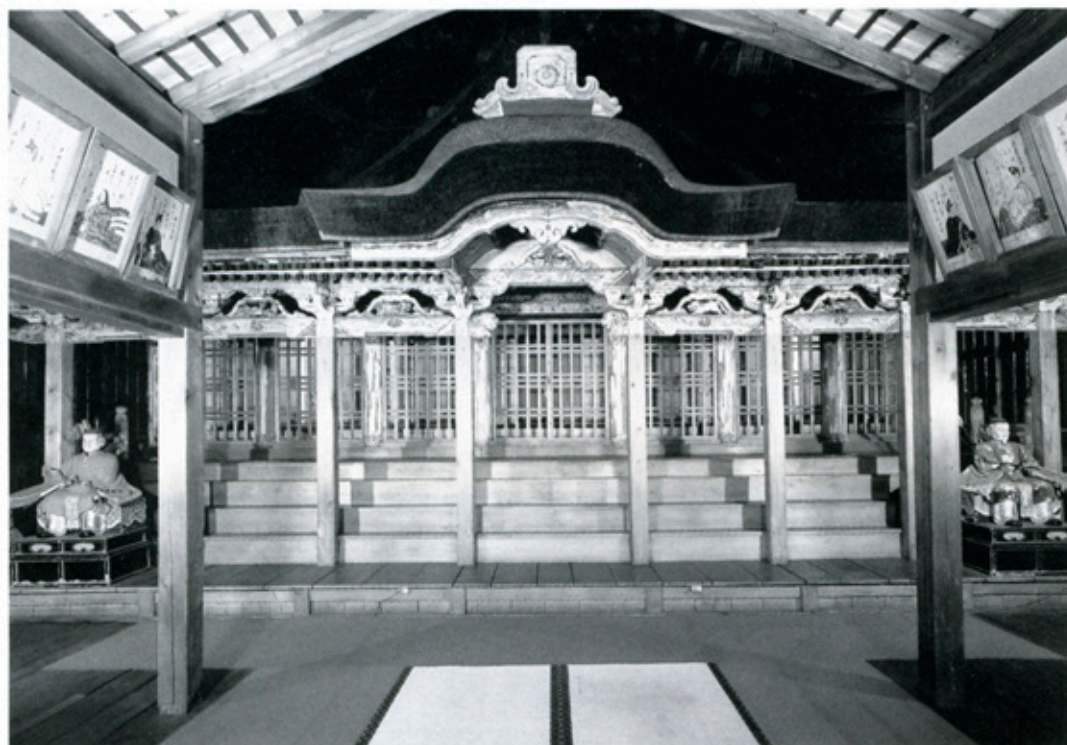
〒564 吹田市岸部北4丁目10番1号

吹田市立博物館

TEL (06) 338-5500

FAX (06) 338-9886

国指定!! 吉志部神社本殿



▲吉志部神社本殿正面

吉志部神社本殿は、これまでに大阪府の重要文化財に指定されていましたが、平成5年5月14日に文化財保護審議会が国の重要文化財に指定するよう文部大臣に答申を行い、これを受けて8月17日に指定されました。

吉志部神社は千里丘陵の南側、「紫金山」と呼ばれる丘陵の中腹に位置しています。渡米系氏族である難波吉師氏の氏神として創立されました。その後、応仁の乱(1467~77)の兵火で焼失し、文明元年(1469)になって再興したと伝



▲空からみた吉志部神社(昭和51年撮影)

えられています。江戸時代には、天照皇太神社ともいい、祭神は7柱でしたが、後に中央間に豊受大神が合祀され、現在では八柱の神が奉られています。正徳3年(1713)の棟札には、「吉志部村鎮守八社」と記されていることから、この頃にはすでに八柱となっていたようです。

現在の本殿の建立については、慶長15年(1610)の棟札写が残っていて、その内容から吉志家次・一和の兄弟が大勧進となり、味舌村(現在の撰津市)の大工が造営したことが知られています。

本殿は七間社の流造です。それぞれの間口は4尺(約121.2cm)と等間隔ですが、中央の間口のみ5尺(約151.5cm)と広くしています。屋根は桧皮葺としていて、正面には千鳥破風と軒唐破風を構え、庇の中央間に頭貫を用いないなど、大阪府下で好んで採用された手法が用いられています。

本殿の外側はほぼ全体に極彩色を施しています。両妻および千鳥破風の虹梁を除いて、絵様は彫り込まずに描いています。

吉志部神社本殿は、木鼻の様式など細部に特徴があり、使用されている材料や素朴

な手法から、有力庇護者によらず、自力で営まれた状況が窺えます。類例の少ない七間社を装飾性豊かに上手にまとめており、近世初頭の郷村社会の一端を窺わせるものとして、価値の高い建物といえます。



▲本殿の庇の中央部分



▲本殿の庇を横からみた状況

きしべかわらがま 吉志部瓦窯の工房跡、府の史跡に指定

岸部北4丁目、吉志部神社境内地に所在する吉志部瓦窯は、今から約1200年前に新たに平安京を築く時、その宮殿の屋根に葺く瓦を生産した窯場です。昭和43年に本格的な発掘調査が行われ、昭和46年には国の史跡の指定を受けて、現在は紫金山公園として整備されています。

そして、この瓦窯の前面に道路を通すことが計画されたことから、平成3年12月から平成4年3月にかけて発掘調査を実施しました。

調査の結果、地表から0.9～1.6m下で吉志部瓦窯の瓦製作工房が見つかりました。工房の南端には瓦の製作に使う粘土を採取した跡があり、その北側では建物の柱穴がたくさん見つっています。これらの柱穴は出土した土器から数時期にまたがることわかりました。吉志部瓦窯の時期のものは、2棟並ぶ東西約6.9m、南北約2.2mの建物(写真)を中心に、そのまわりにそれよりやや小さな建物が並んで一つのグループ

を構成しています。工房はこのように大きな建物を中心に、そのまわりに小さな建物が数棟並ぶ建物の集まりを一つの群として、数グループで構成されています。

また、建物の周囲には瓦の製作に使用した製作台の跡もたくさん見つかり、非常に注目されるものです。

瓦の製作は粘土の採取から、製作、そして窯で焼くという作業の手順がありますが、吉志部瓦窯ではその作業場が全て明らかとなり、当時の瓦の製作の実態を考える上で、非常に重要な遺跡であることがわかりました。

調査の結果、国の史跡に指定された瓦窯群の前にも、重要な遺構が存在することが明らかとなったことから、関係者間で協議を行い、建物群の中心となる500㎡(岸部北4丁目106-1・2・392の一部)について平成5年3月31日に大阪府の史跡に指定されました。



▲見つかった建物跡(点線で結んだ範囲)

平成5年度の新規発見遺跡



▲新しく発見された遺跡

吹田市ではここ数年、開発行為に伴う発掘調査の件数が急増し、これに伴い遺跡の新規発見や範囲の拡大が顕著にみられます。

平成5年度も埋蔵文化財発掘調査の結果、^{たか}高城遺跡（高城町）・^{みやのまえ}宮之前遺跡（内本町3丁目）・^{にしやしゅう}西の庄遺跡（西の庄町）・^{はらひがし}原東遺跡（原町4丁目）・^{てんどう}天道遺跡（天道町）・^{かたやまやしきまわり}片山屋敷廻遺跡（片山町3丁目）・^{めだから}目依遺跡（目依町）・^{もとまち}元町遺跡（元町）の8遺跡が新たに発見され、^{しちおひがし}七尾東遺跡・^{たるみみなみ}垂水南遺跡・^{たるみなか}垂水中遺跡B地点・^{たかばま}高浜遺跡・^{たかぎ}高城遺跡の5遺跡7件で遺跡の範囲がさらに拡大することが判明しました。今回は、

これらのうちの4遺跡について紹介します。

元町遺跡

元町遺跡は、専用住宅建築工事に伴う事前の試掘調査によって、表土すぐ下の浅い所から発見されました。小規模な調査に止まったため、全容を解明することはできませんでしたが、2時期の遺構が確認されました。上の層からは落込み1ヶ所、下の層からは土坑2基（土坑1・2）がみつかりました。落込み遺構は、東西方向に延び、北側に緩やかに傾斜するものです。土坑1は、直径約1.5m、深さ約60cmを測る、円形

のもので、中から完形の土師器杯を含む平安時代の多量の土器が出土しました。土坑2については一部分が確認されただけで詳細は不明です。出土遺物については表土すぐ下の遺物包含層と落込み遺構及び土坑から土師器（杯・皿）・白磁・瓦器・黒色土器・須恵器・瓦・土壁等が出土しました。多くが平安時代の後半頃のものと思われる。当地の近くには都呂須遺跡など、弥生・古墳時代・中世期の集落遺跡の存在が知られているにもかかわらず、平安時代のものとしては、吉志部瓦窯の製品と判断される平瓦片が出土しただけであり、これまで遺構は認められていませんでした。

しかし、平安時代は、延暦4年(785)に三国川（現在の神崎川）と淀川が開通したことにより、清住寺領吹田庄が貞観7年(865)に成立するなど、当地一帯の重要性が増した時期であり、こういった荘園の集落が展開した可能性は十分に考えられます。

このように、平安時代の集落に関係すると考えられる遺構が新たに確認されたことは、当時期の集落の動向を探る上で重要な成果といえます。



▲元町遺跡から出土した土師器(平安時代)



▲元町遺跡から出土した瓦器(平安時代)

高城遺跡

高城遺跡は高城町で発見された遺跡で、平安時代の土師器や黒色土器などと共に、柱穴や溝などが検出されました。この地点は、平安時代以降、瀬戸内と京とを結ぶ重要な水上交通路となった三国川のすぐ北側に当たり、また低湿地的な土地条件だった周辺地よりも、地盤が若干高いこともあり、人々が生活をするのに、都合が良かったと考えられます。

目依遺跡

JR西日本吹田工場内で発見された遺跡で、弥生時代後期の甕や高杯の破片、鎌倉・室町時代の土師器や瓦器などの破片が出土すると共に、柱穴や土坑などの遺構が検出されました。また調査区を南北に分けるような形で、深さ1mほどの落ち込みが確認でき、その北側は洪積層、南側では沖積層がみられ、吹田市の旧地形を考える上でのデータを得ることができました。

七尾東遺跡

七尾東遺跡は、平成4年に弥生時代の竪穴式住居跡などが発見された遺跡です。今回はその北側において試掘調査を行ったところ、主に中世の土器の破片が多数出土し、遺跡が北側にも広がっていることがわかりました。

その後、調査を拡大するに伴って、中世の遺物の他に、弥生土器の破片と共に、柱穴や土坑、溝が出土し、ここにまで弥生時代の集落が広がっていたことがわかりました。

また、今回の調査では、出土した1条の溝から縄文時代晩期の土器の破片が出土し、層位的に縄文時代の溝である可能性が考えられ、明確な縄文時代の遺構が確認されていない吹田市内では、今後に期待できるものといえます。



▲七尾東遺跡出土縄文土器拓本(1/2)

吉志部遺跡の発掘調査

吉志部遺跡は吹田市岸部北1丁目の南向きの傾斜面に位置する遺跡で、昭和の初期から、農作業中に多数の旧石器や縄文時代の石鏃などが採集されたことにより、その存在が知られるようになりました。

発掘調査は、現在までに、7次にわたって実施され、主に旧石器を中心とした資料を得てきました。これまでの調査成果のうちで、ここでは第4次、第5次、第7次の調査を中心に述べてみます。

これら3回の調査は、当遺跡内で電気工事が行われることになり、そのため遺跡の一部が破壊されると考えられたために実施したものです。第4次が試掘調査で、その拡大調査として第5次、第7次調査を実施しました。試掘調査では、20点の石器片を検出したのですが、このうち15点が遺跡の南西部から出土しました。そしてその後行った拡大調査（第5次）では、サヌカイトを中心とした約70点の石器片が出土し、やはり遺跡南西部からの出土が多く、約40点を検出



▲礫群出土状況



右、表面。左、裏面
国府型ナイフ形石器

しました。この出土点数については、南西部の調査面積が約15㎡と小規模なことや、それまでの吉志部遺跡での調査成果などを考えると、大きな成果であると言えるものでした。

この調査では、4点のナイフ形石器が出土し、このうちの1点が国府型ナイフ形石器と呼ばれるものでした。この石器は、主に瀬戸内地方を中心に約2万～1万5千年前頃に製作、使用されたと考えられているものです。このことから、吉志部遺跡の年代というものが、わずかながら把握できるようになりました。

第5次調査では以上のような成果を得ることができたのですが、その後、遺跡南西部で新たに調査をする必要が生じ、第7次調査を実施することとなりました。この調査では、第5次調査の結果も踏まえ、より一層慎重に調査を進めました。そうすると、こぶし大程度の石がまとまって出てきました。このような石のまとまりを礫群と言います。礫群は、土器のなかった旧石器時代に、主に食べ物などに火を加えるために用いられた石ではないかと考えられるもので



▲吉志部遺跡位置図(1/5000)



翼状剥片出土状況

す。こういった礫群の出土は北摂地域では少なく、もちろん吹田市では初めての出土例となりました。この礫群の出土によって、吉志部遺跡は単なる狩猟だけの場ではなく、短期間であろうとは考えられますが、旧石器人が生活した場所であることがわかりました。また翼状剥片という石器も今回の調査で出土しました。これは、国府型ナイフ形石器を製作する過程でできるものなのですが、鳥が翼を広げた形に似ていることから、このように名付けられています。この石器の出土によって、第5次調査で得られた年代観を、さらに補強できるようになりました。

この他、第7次調査でわかったことを上げてみますと、石器の原材料としては、瀬戸内地方の遺跡の多くがそうであるように、サヌカイトが主体となるのですが、吉志部遺跡では、チャートによる石器も割合として多く、礫群の石についてもチャートが多くを占めています。これらの原産地については明確にはわかりませんが、恐らく、サヌカイトについては二上山産、チャートについては丹波山地産と考えられます。このことから吉志部遺跡では違う産地の石材が使



▲シリコンゴム流し込み作業風景



上3点、ナイフ形石器
下左、スクレイパー
下右、ポイント
ポイントはチャート製
他はサヌカイト製

用されていたことになり、これは、他集団との交流の中において石を得たのか、それとも自らの移動によって石を得ていったのかという問題となり、旧石器時代を考える上での大きなテーマにつながるものです。このように、吉志部遺跡は、徐々にその性格付けができるようになるとともに、それを解明するための課題も増してきました。

以上、旧石器時代を中心にみてきたのですが、吉志部遺跡は、旧石器時代だけではなく、旧石器時代末期から縄文時代草創期（約1万年前）にかけて使用されたと考えられている有舌尖頭器が、比較的まとまって出土しています。また中世の掘立柱建物跡が第5次調査で検出されており、吉志部遺跡では、数時期にわたって、人々が活動を行っていたのです。

【礫群の復元について】

礫群は前述しましたように、北摂地域では出土例が少なく、今回出土の礫群については、その出土状況がわかるように、一部をレプリカとして残すことにしました。このレプリカを作るには、まずシリコンゴムをレプリカとして残す部分に流し込んで型を取ります。次にその型にプラスチック樹脂を入れ、レプリカの原型を作り、そして出土状況の写真や、実物の石を見ながら着色をして仕上げました。このレプリカについては、市立博物館に展示することとなりますので、機会がありましたら、皆さんぜひお越し下さい。

史跡七尾瓦窯跡隣接地の発掘調査

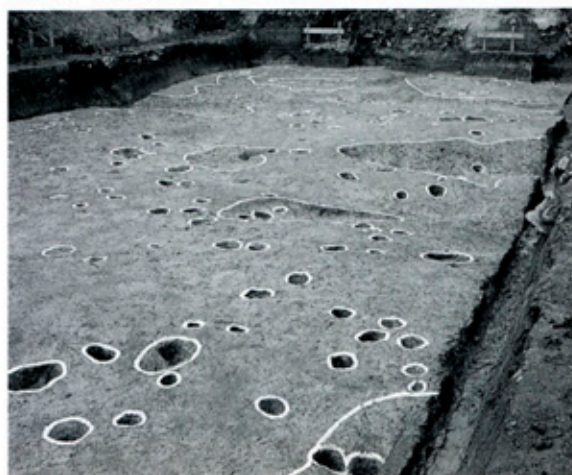
七尾瓦窯跡は、吹田市岸部北5丁目10番ほか
に所在する奈良時代の瓦窯跡です。昭和54年に
行われた発掘調査で7基の瓦窯跡が確認され、
聖武天皇により造営された難波宮に、瓦を供給
した瓦窯であることが判明しました。昭和55年
に国の史跡に指定され、平成元・2年度には整
備が行われ、市民に公開されています。

さて、瓦窯周辺地に対する調査は、昭和58～
60年及び平成4年度に実施され、瓦窯の北側には
大溝が走行するのが確認されています。この大
溝は瓦窯操業期に機能したと考えられるもので
す。

今回の調査は共同住宅・事務所・倉庫ビル建築
工事及び道路建設工事に伴う事前調査として、
岸部北5丁目26・28で平成5年5月から9月ま
で実施したものです。

今回の調査では、検出した遺構として、奈良
時代（瓦窯操業期）の大溝、ピット群、溝、土
坑等があります。大溝はこれまでの調査で確認
されていたもので、今回の調査ではその西側の
延長部分が検出されました。幅4～5m、深さ
約1mを測ります。堆積土は粘土を主体として
おり、上層部には瓦溜まりとなったところも
ありました。ピット群は2層から見つかりました。
上層は瓦窯操業期のものと考えられ、径5～
20cmのピット（小さな穴）が合計約200ヶ所確認
されました。小規模で比較的集中しており、ま

▼下層ピット群検出状況



▲大溝検出状況(奈良時代)

た、大溝の際にならんでいるものもありました。
下層は、径5～30cmのピットが合計約320ヶ所検
出されました。

出土遺物は瓦、須恵器、土師器、瓦器、縄文
土器、石器があります。瓦は平瓦、丸瓦、軒平
瓦、軒丸瓦があり、いずれも瓦窯操業期のもの
です。縄文土器は磨滅が著しいのですが、縄文
晩期の船橋式と呼ばれる土器と思われます。石
器は縄文時代草創期の有舌尖頭器です。

以上、述べてきたような遺構・遺物の検出が
あり、今回新たに検出したピット群は、上層に
ついては明確な掘立柱建物等の柱穴とは考え
られず、簡易な小屋等の建物の一部と考えられ、
瓦窯工房の一部の可能性もあります。また、下
層のピット群については、詳細を検討中ですが、
掘立柱建物等の柱穴かもしれません。

▼瓦出土状況(奈良時代)

